⑾転々校舎を移し荊の道を行く
学生運動史を語るS・P・S・労働学校

一橋はと問へば算盤と答へん、禅問答にもありさうだが、前垂掛の学生を今も偲ばしめる学園にも数へれば限りない学生運動の潮が満ちては干え、干えては満ち、過去十年の細路を造つた。定款改正、寵城事件、選手制度廃止等々、然しこれ等の中でS・P・S労働学校の歴史はその青史に輝きを添へる最大のものと云へる。

S・P・S（Societe de la pensée Sociale）労働学校は恰も吾国の労働運動の最盛期へと躍進する時代に孤々の声を上げた大正十二年震災前S・P・Sの事業として「東京および附近の労働組織」の調査に取掛つたのが動機となつて大震災を境に十三年五月十九日芝公園友愛住宅の一部に開校式を挙げた。開校当時講義担当者の顔触れがすべて本学の若い教授、助教授であつた点から見れば、自由主義を翳す一橋が学問のデモクラシイのために労働者階級の中に進軍した事は学園の延長運動とも考へ得るが、主催者側の学生に果してこの尺度があてはまるかどうか、恐らく全く別個の視角から出発したと云へるだらう。そこにこそ又学生運動史を輝かしめる強い意志の火花が散る。その事実を開校宣言書は十二分に裏付けてゐる。

「S・P・S労働学校はS・P・Sにより創られた一社会運動の現れである。それは労働と学問との分離に対する社会への抗議であり、同時に来るべき社会への準備である」

この意図詮索は別として学園延長運動の旗の下に生れ社会運動としてあらゆる制圧下に混沌の中に消えてゆく短命な荊棘の道は最もアイピカルな学生運動の狭き門への歩みを物語るものである。

友愛住宅の薄暗い電灯のもとに壊れかけて時々煙突が倒れては講義を中断したと云ふストウブを囲んで開かれる午後六時半から九時半まで日二課の授業は知識程度が種々雑多なため講師にも聴衆にも難解だつたが当時新帰朝の金子（鷹）教授は本学の講義を休んだ折も出講するという熱心振りだつた。第一回の講義は次の様な陣容であつた。法学通論（岩田）日本経済史（猪谷）労働法制（孫田）労働組合（上田）近世産業史（上田辰）の諸教授、然し自由論題を中心に行われるS・P・S同人の指導は本学のゼミナール制を採用して「賃労働と資本」「近世社会主義の潮流」等が討論された。斯うして大正十四年四月には八十人の卒業生を送り出したが、当時の同人が回顧する如く無知識階級」労働組合の本質を知らしめるまで教育する事であるなら吾国の労働運動に忘れ得ぬ貢献を与えたと云へよう。生徒の職業は第二期四十三名中機械工（二一）印刷工（七）事務（六）……の比率である。

芝公園を去つた教室は駿河台仏教会館から大崎の日大労働組合総聯会本部へ、その後昭和二年四月千住交隣園に移された。この頃S・P・Sは学内の研究的学生を集めて二百余名に上り、最も華かなりし学園自由主義を背景に思想の転換を行つた。後藤寿夫氏を中心とする社会科学研究会が本学に勧誘に来た折その入会を拒絶したが、同人六、七十名であつた社会科学研究会を数においても圧倒するものがあつた。

然し評議会最盛期と共に最高潮に進んだS・P・Sは、三・一五事件と共に衰滅する、二年四月上田部長のもとに開かれた開校式は中止されて交隣園から退き、労働学校は先輩の手に渡り深川猿江町同潤会託児所に移つてこゝで開校されたが、昭和四年一月五日上田部長辞任と

共に部長難に陥り予算に支障を来しこゝに於て尊い歴史をもつたS・P・Sはついに廃止するのやむなきにいたつたのである。

第一九八号（昭和九年十一月十二日）

昭和十年

(1)本学経済調査部組織整備す
新たに部員を増加

本学の研究所活動を統括する機関として設置された調査部の組織および規定は去る四日（月）の学部教授会に提出され左の如く決定し、ついで十二日の委員会において新部員および研究員を詮衡、調査出張費の支出方法等が定められた。組織および細則は左の如くである。

一、本学に経済調査部を置く。

一、調査部は本学各部科教授、助教授、助手及び補手を以て之を組織す。大学長は必要に応じ前項以外の教職員をして加入せしむることあるべし

一、調査部は産業経済に関する資料の蒐集及調査研究をなすことを目的とす

一、調査部に次の職員を置く。部長（一名）委員、研究員、幹事（各若干名）

一、部長は委員の互選により大学長之を命ず、部長は調査部を代表し、其の事務を綜理し、研究員を指揮督励す

一、委員は本学教授、助教授中より大学長之を命じ其の任期は二年とす。但し重任を妨げず、委員は委員会を組識す、委員会は調査部の